

紅蓮白蓮の香ゆかしく衣袂に裾に薫り来て、浮葉に露の玉動き立葉に風の軟吹ける面白の夏の眺望は、赤蜻蛉菱藻を颯り初霜向ふが岡の樹梢を染めてより全然と無くなつたれど、赭色になりて荷の茎ばかり情無う立てる間に、世を忍び氣の白鷺が徐々と歩む姿をかしく、紺青色に暮れて行く天に漸く輝り出す星を背中に擦つて飛ぶ雁の、鳴き渡る音も趣味ある不忍の池の景色を下物の外の下物にして、客に酒をば龜の子ほど飲ます蓬萊屋の裏二階に、氣持の好ささうな顔して欣然と人を待つ男一人。唐棧揃ひの淡泊づくりに住吉張の銀煙管おとなしきは、職人らしき俠氣の風の言語拳動に見えながら毫末も下卑ぬ上品質、いづれ親方親方と多くのものに立らるゝ棟梁株とは、予てから知り居る馴染のお傳といふ女が、嗚お待ち遠でござりませう、と膳を置つゝ云ふ世辞を、待つ退屈さに捕へて、待遠で待遠で堪りきれぬ、ほんとに人の氣も知らないで何をして居るであらう、と云へば、それでもお化粧に手間の取れませんが無理は無い筈、と云ひさしてホ、と笑ふ慣れきつた返しの太刀筋。アハ、それも道理ぢや、今に來たらば能く見て呉れ、まあ恐らく此地辺に類は無らう、といふものだ。阿呀恐ろしい、何を散財つて下さります、而して親方、といふものは御師匠さまですか。いゝや。娘さんですか。いゝや。後家様。いゝや。お婆さんですか。馬鹿を云へ可愛想に。では赤ん坊。此奴め人をからかふな、ハ、ハ、ハ、ホ、ホ、と下らなく笑ふところへ襖の外から、お傳さんと名を呼んで御連様と知らすれば、立上つて唐紙明けにかゝりながら一寸後向いて人の顔へ異に眼を呉れ無言で笑ふは、御嬉しかると調戲つて焦らして底悦喜さする冗談なれど、源太は却つて心から可笑く思ふとも知らずにお傳はすいと明くれば、のろりと入り来る客は色ある新造どころか香も艶もなき無骨男、ぼつぼつ頭髮のこりこり腮髯、面は汚れて衣服は垢づき破れたる見るから厭氣のぞつとたつ程な様子に、流石呆れて挨拶さへどぎまぎせしまゝ急には出ず。

源太は笑を含みながら、さあ十兵衛此所へ来て呉れ、関ふことは無い大胡坐で楽に居て呉れ、とおつおつし居るを無理に坐に居系、頓て膳部も具備りし後、さてあらためて飲み干したる酒盃とつて源太は擬し、沈黙で居る十兵衛に対し、十兵衛、先刻に富松を態々遣つて此様な所に来て貰つたは、何でも無い、実は仲直りして貰ひたくてだ、何か汝とわつさり飲んで互ひの胸を和熟させ、過日の夜の我が云ふた彼云ひ過ぎも忘れて貰ひたいとおもふからの事、聞て呉れ斯様いふ訳だ、過日の夜は実は我も余り汝を解らぬ奴と一途に思つて腹も立つた、恥しいが肝癢も起し業も沸し汝の頭を打碎いて遣りたいほどにまでも思ふたが、然し幸福に源太の頭が悪玉にばかりは乗取られず、清吉めが家へ来て酔つた揚句に云ひちらした無茶苦茶を、嗚呼了見の小さい奴は詰らぬ事を理屈らしく恥かしくも無く云ふものだと、聞て居るさへ可笑くて堪らなさに不図左様思つた其途端、某夜汝の家で陳べ立つて來た我の云ひ草に気が付いて見れば清吉が言葉と似たり寄つたり、ゑゝ間違つた一時の腹立に捲き込まれたか残念、源太男が廢る、意地が立たぬ、上人の蔑視も恐ろしい、十兵衛が何も彼も捨て辞退するものを斜に取つて逆意地たれば大間違ひ、とは思つても余り汝の解らな過ぎるが腹立しく、四方八方何所から何所まで考へて、此所を推せば某所に巒積が出る、彼点を立てれば此点に無理があると、まあ我の智慧分別ありたけ尽して我の為ばかり籌るでは無く云ふたことを、無下に云ひ消されたが忌々しくて忌々しくて随分堪忍も仕かねたが、切いよいよ了見を定めて上人様の御眼にかゝり所存を申し上げて見れば、好い好いと仰せられた唯の一言に雲霧は既無くなつて、清しい風が天空を吹いて居るやうな心持になつたは、昨日はまた上人様から熊々の御招で、行つて見たれば我を御賞美の御言葉数々の其上、いよいよ十兵衛に普請一切申しつけたが蔭になつて助けてやれ、皆汝の善根福種になるのぢや、十兵衛が手には職人もあるまい、彼がいよいよ取掛る日には何人も傭ふ其中に汝が手下の者も交らう、必ず猜忌邪曲など起さぬやうに其等には汝から能く云ひ含めて遣るがよいとの細い御諭し、何から何まで見透して御慈悲深い上人様のありがたさにつくづく我折つて歸つて來たが、十兵衛、過日の云ひ過ごしは堪忍して呉れ、斯様した我の心意氣が解つて呉れたら従来通り淨く陸じく交際つて貰はう、一切が斯様定つて見れば何と思つた彼と思つたは皆夢の中の物詮議、後に遣して面倒こそあれ益無きこと、此不忍の池水にさらりと流して我も忘れう、十兵衛汝も忘れて呉れ、木材の引合ひ、鳶人足への渡りなど、まだ顔を売込んで居ぬ汝には一寸仕憎からうが、其等には我の顔も貸さうし手も貸さう、丸丁、山六、遠州屋、好い問屋は皆馴染で無つては先方が此方を呑んでならねば、万事齒痒い事の無いやう我を自由に出しに使へ、め粗の頭の鋭次といふは短氣なは汝も知つて居るであらうが、骨は黒鉄、性根玉は憚りながら火の玉だと平常云ふだけ、切じつくり頼めばぐつと引受け一寸退かぬ頼母しい男、塔は何より地行が大事、空風火水の四ツを受ける地盤の固めを彼にさせれば、火の玉鋭次が根性だけでも不動が台座の岩より堅く基礎確と据さすると諸肌ぬいで仕て呉るゝは必定、彼にも頓て紹介せう、既此様なつた暁には源太が望みは唯一ツ、天晴十兵衛汝が能く仕出来しさへすりや其で好のぢや、唯々塔さへ能く成れば其に越した嬉しいことは無い、苟且にも百年千年末世に残つて云はゞ我等の弟子筋の奴等が眼にも入るものに、へまがあつては悲しからうではないか、情無いではなからうか、源太十兵衛時代には此様な下らぬ建物に泣たり笑つたり仕たさうなど云はれる日には、なあ十兵衛、二人が舍利も魂魄も粉灰にされて消し飛ばさるゝは、拙な細工で世に出ぬは恥も却つて少ないが、遣したものを弟子め等に笑はる日には馬鹿親父が息子に異見さるゝと同じく、親に異見を食ふ子より何段増して恥かしがる、生磔刑より死んだ後塩漬の上磔刑になるやうな目にあつてはならぬ、初めは我も是程に深くも思ひ寄らなんだが、汝が我の対面にたつた其意氣張から、十兵衛に塔建てさせ見よ源太に劣りはすまいといふか、源太が建てゝ見せくれう何十兵衛に劣らうぞと、腹の底には木を鑽つて出した火で觀る先の先、我意は何も無くなつた唯だ好く成て呉れさへすれば汝も名譽我も悦び、今日は是だけ云ひたいばかり、嗚呼十兵衛其大きな眼を湿ませて聴て呉れたか嬉しいやい、と磨いて礪いで礪ぎ出した純粹江戸ツ子粘り氣無し、一で無ければ六と出る、忿怒の裏の温和さも飽まで強き源太が言葉に、身動きさへせで聞き居し十兵衛、何も云はず疊に食ひつき、親方、堪忍して下され口がきけませぬ、十兵衛には口がきけませぬ、こ、こ、此通り、あゝ有り難うござりまする、と愚魯しくもまた眞実に唯平伏して泣き居たり。